とを知ることは出來ない、故に此等の記錄の外に別に確實な史料を拾集し、一方には從來傳へられてあることの、確であるか否やを確かめ、一方には記錄に洩れた新しい事實を探り出さうといふ努力が生じて來る譯である。

二　古代語の發見

前世紀の末以來、重要なる學術上の探險が屢々蒙古及び中央亞細亞の地に行はれたのは、全く這般の要求を充す爲であつた、此等の探險の結果は實に驚嘆すべきもので、これによつて從來主として支那史籍によりてのみ窺知するに過ぎなかつた東洋諸國の事情を、直接此等諸國の文記によりて研究し得ることになり、今日既にその結果の發表せられたものも少くない、併しながら此等の文記は殆んど皆今日に於ては廢滅に歸した言語を以て記され、その文字もまた或種類のものは全く解し得ないものであつたので、之を研究の資料として用ゐる爲には、先づその言語及び文字の研究から始めてかゝらねばならぬ次第であつた、熱心な歐洲諸學者の努力は、遂に此の困難に打ち克つて、能くその鍵を握り得るに至つた、今先づかくして發見せられた古代の言語に就いて述べ、次に此等の言語文字で記された史料の研究の結果に及ぶことにする。

（イ）古代トルコ語の發見。

アルタイ語族卽ちトルコ、蒙古、滿洲語族の間には、その何れについても、古い時代の言語の資料は極めて少く、十一世紀の半頃過ぎに回鶻語卽ち一種のトルコ語で書いたクダツク、ビリク（Kudatku Bilik）といふ書物が